

ことばもクスリ

患者と話せる医師になる

山内 常男 編

言葉が生み出す葛藤や可能性のヒントが詰まった一冊

日赤看護大名誉教授/臨床看護学研究所長

川 島 みどり

全身の痛みを長く訴える患者に「データ上からも痛むはずはない。あとは、あなたの心の持ち方次第。あまり神経質にならないように」と、訴えそのものを否定した医師。通常よくみられる場面ではある。2週間後、別の医師の「よく我慢したねえ。長いことつらかっただろう」との言葉で執拗な痛みが薄れ、その晩は鎮痛薬を飲まないで済んだ例を目の当たりにしたことがあった。

著者は、医師の言葉が患者に与える影響を意識した医師らである。おそらく同じ病院の医師同士でも、隣の診察室での会話を聞く機会はほとんどないだろう。それだけに、受付の対応から始まる外来診療の流れに沿った場面での、言葉が生み出す様々な葛藤や可能性から得られるヒントは多いと思う。

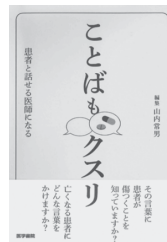
書名は『ことばもクスリ』だが、効果のある例は、相手がそれを認め表出しない限り、通常は何も起こらず過ぎていくのが常であるので、どちらかといえぱリスク面に比重が置かれている。いずれにしても、言葉は単なるツールや形ではなく、その人の人格や見識、文化の影響を強く受けていること、言葉によるコミュニケーションは人間関係の入り口でもあることを改めて考えさせられる書である。どんなに親しい間柄でも、決して言うてはならない言葉もあるし、本人が気づかぬままに発した言葉が、相手の人生を変えさせるような契機になった例は、日常的にもみられることである。

とりわけ、医師が発する言葉が、他の人のそれに比べてより重いのは、心身不調によって受容のキャパシティが狭められている相手であるうえに、専門的知識の差による優位性は、いつでも医師側にあるためだと思う。だが、「日常の言葉を

使って書いたり話したりすることの出来なくなった人は、はっきり考える力そのものを失う」(鶴見俊輔)とすれば、専門の名によって保たれる権威は早晚崩れるだろう。その意味からも、副題に「患者と話せる医師になる」とあるのは、独自の専門用語の世界で過ごすうちに、普通の人に普通の言葉で語れなくなったことへの、編者らの真摯な思いと受け止めたい。

本書には、9章にわたって医療における言葉の問題が多角的に取り上げられている。職場や職種間での討論により、いつそう深められるとよいと思う。最後に掲載されている故浜田晋医師のインタビューは、精神科医の日常に根ざした言葉の本質がきめ細やかに述べられていて味わい深い。「ちゃんと患者と向き合って、ぬくもりのある人間どうしの付き合いができてからこそ、そこに生き生きとした言葉が生まれてくる」との、かつての看護記録への評価は、コンピュータのディスプレイと向き合って、まともに患者と視線を交わさない傾向への警告でもある。

「心に響く言葉」が飛び交う医療現場で、客観的なデータを参考にしながらも、その本人が語る言葉への感性を研ぎ澄ますことが、今、最も医療人に求められているのではないだろうか。医師をはじめ医療関係者の一読をお勧めする。



●A5 頁232 2011年
定価2,625円
(本体2,500円+税5%)
[ISBN978-4-260-01383-3]
医学書院刊(☎03-3817-5657)